

Title	共産主義の経済的基礎に就て(下)
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.6 (1924. 6) ,p.835(71)- 847(83)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240601-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

that since our officers are gentlemen, and "gentlemen commonly have no industrial value," the mortality among them "may be set down as a net gain in the economic respect." Professor Veblen might perhaps tell us that he feels himself stronger as a critic than as a inventor, or that he is not very sure of his own ideas of reconstruction, and that if he formulated them they would not amount to a complete scheme. We should answer that no one else is in a better case, and that we hungering for anything, complete or incomplete, which may help to make that about the future of mankind seems worth while."

V.

Veblen's Place in Economics.

It is difficult to give an appraisal of the place that a man still living holds in the develop-

ment of economics, particularly one whose principal work has been along such unorthodox lines as that of Veblen. His abstract theoretical studies would not entitle him to a high rank. But in the new light which he has thrown on man's motives in economic life he has made a real contribution. There is no doubt that in his general approach he is on the track that economic development is going to follow; a treatment more in accord with the newer concepts which evolutionary thought has introduced, and a greater utilization of the discoveries in other sciences. The many references to Veblen in current sociological and economic writing show the power of his ideas, and the writer believes that he has had more influence on conservative thinkers than they would care to admit.

共產主義の經濟的基礎

に就て (下)

伊藤 秀一

六

茲に「人類が存在して以來、始めて、各部分の總ゆる點に於て、調和的に建設せらるゝ所の制度が成立する。其處には社會的にも生産的にも何等の階級が無い。其れは人類が人類に對する鬭争を永久に剿滅し、自然の無限の富を速かに掌握する所の一の共同體の中に全人類を包含する。」(Bucharin. Oekonomik. S. 190) 再び Marx の所説に還つて之れを観るに「共產主義社會のより高き階梯に於ては、個人が分業の下に奴隸的に束縛せらるゝ事従つて又精神的勞働と肉體的勞働との對立が消滅したる後、勞働が

單に生活の爲めの一手段たるのみならず、其れ自ら第一の生活欲望となるに至る後、個人の總ゆる方面に於ける發展に伴つて、生産力も亦増進し、團體的富の一切の源泉が十分に流れ出す様になつた後、此の時始めて狹隘なブルジョアの權利思想が全く踰越せられ、社會は其の旗印に「各人は其の能力に應じて、各人に其の欲望に應じて」と書く事が出来る。」(Marx. a. a. O. SS. 145-146)

Lenin も亦右の一句を引用し來り、且つ言ふ。生産手段の共有及資本の收用は生産力の異常なる發展を可能ならしむるだらう。「如何に資本主義が法外にも此の發達を阻害して居る乎、又如何に多くの進歩が、著るしき發達を遂げたる近世技術の基礎の上に爲され得る乎は既に知られて居る。故に我々は充分の自信を以て資本の收用は疑もなく生産力の強大なる發達に

結果すと言ひ得るのである」と。(Lenin. a. a. U. S. 89)

更に勞働の奴隸的狀態よりの解放——分業に依る束縛及び精神的勞働と肉體的勞働との對抗の消滅に伴ひ、又其の結果として、勞働は最早や生活の一手段ではなくて自ら第一の生活欲望となるに及んで、既に資本主義的桎梏を免れたる生産力の異常なる發達傾向は層一層助長せられ、團體的富の一切の源泉はより十分に流れ出すであらう。こは即ち「人々が社會的共同生活の根本的原則を遵守するの習慣となる時、彼等の勞働が非常に生産的となり、従つて彼等が自發的に其能力に應じて勞働するの時」(ebenda)に他ならないのである。

又他方より之れを觀察するならば「狹隘なるブルジョアの權利思想」なる語によりて示されたる分配方法、即ち給付されたる勞働量に比例

して行はる、消費財の分配——實際上は同量ならざる勞働に對する報酬として同等でない各人に同量の消費財を與ふるの不等——換言せば「一人が他の者よりも半時間だけ多く働かなかつたか如何か、一人が他の者よりもより少く支拂はれて居ないか如何かといふ事を、人々がかの Shylock の慘めさで計算せざるを得ない所の狹隘なるブルジョアの權利思想」(ebenda. S. 88)も亦叙上の結果として全く踰越せられ、各人は其の欲望に應じて自由に彼の必要とする所のものを社會から受取るのである。

茲に始めて「各人は其の能力に應じて、各人に其の欲望に應じて」と言ふ共產主義の根本原則が確立するものとせらるゝ。而して Lenin の敷衍強調する所のマルクシズムの國家理論に従へば、此時階級の對立全く消滅し去り、其れど共に國家も亦自ら死滅するものとせらるゝ、人類

の前史は茲に終熄し、人は始めて必然の國から自由の社會へ躍出し、其時始めて「各人の自由なる發展が全員の自由なる發展の條件」となるのである。

斯く叙し斯く觀じ來れば、其の必然的に到達すと稱せらるゝ所の窮極の社會は畢竟無政府共產主義の社會に他ならずと言ふを得可く、のみならず共產主義社會の經濟的基礎と觀せらるゝ諸點は又等しく無政府共產主義の主張の根底に横はるものなる事が容易に看取せられ得る。姑く近世科學的無政府主義の建設者と稱せらるゝ Kropotkin の所論中より此等の諸點に關説する所二三を左に摘出して、之れが比較検討の用に供する事にし様う。蓋しそは一面、叙上の結論に對する一個の説明としても考え得られるからである。

七

先づ生産力の將來の發展に關する Kropotkin の見解は著るしく樂觀的である。即ち其所見の要旨は、一度び資本主義的組織の下に必然的な生産力の制限と障礙を排除するを得ば、今日の科學的進歩を以つてして、生産力發展の無限に大なる可き事明白であるとすることに在る。今日生産者階級を構成するものが假令文明諸國民の三分の一に過ぎざるにも拘らず、猶且つ各家庭に或る程度の愉樂を齎し得るだけの貨物量を生産して居る事を我々は知つて居る、更に、今日他人の勞苦の結實を蕩盡して居る所の者全體が一度び其の閑暇を有用勞働に用ふるならば、社會の富は生産者の數に比例し或は其れ以上の割合で増加するだらうと云ふ事を知つて居る。最後にかの Malthus の理論とは反對に、人類の生産力は其の再生産力よりも遙かに速かなる割合で増加する事を知つて居る。人口が益々

緊密に集合するに至れば富を創造する彼等の力は更に一層速かに増大するものである。「The Conquest of Bread, cheaper edition, p. 16) 又曰く「科學的智識を獲得し、且つ生活資料及享樂財の人爲的生産の爲めに協力する所の人類にとつて、法則は正に Malthus のそれと正反對である。生活資料及享樂財の蓄積は人口の増加よりも遙かに速かなる割合で行はれて居る。進化の法則及び効果増殖の法則より推定し得る唯一の結論は、生活資料の有効量は、人口が——社會組織の何等かの缺陷に依つて人爲的に(且つ一時的)抑制せられざる限り——稠密となるに比例して其の割合で増加するといふ事である。我々の生産力に關して言ふならば、それは科學的知識が成長し其れを普及するための方法がより容易になり、而して發明的天才が過去の總ゆる發明に依つて鼓舞さるゝ程度に應じて、尙

一層速かなる割合で増大するのである。」と
/ Anarchist Communism: Its Basis and Principles.
Freedom Pamphlet, p. 12)

Kropotkin の考ふる所に遵へば、資本主義的組織に於ける生産力の最大の障礙は不勞不生産階級——他人の勞働の結果を蕩盡し自らは何物をも生産せざる階級の存在である。而も常に勞働の結果を徒費する許りではなく、此の生産組織に於ける資本の所有者は、或は個意に生産を制限し、或は生産の結果を破棄滅失せしむる事に依つて、専ら利潤の増大のみを慮るを常習とするものである。其の結果は勞働力を生産市場から排除して失業に誘導する。生産手段が少數者に歸屬する事から結果する所の此の直接的、意識的の生産の制限に加へて、其處には又間接的、無意識的の制限が存在する。これは人類の生産的精力を、より大なる生産の

増加のために適用せずして、徒らに、富者の愚かなる奢侈的欲望満足の爲めに浪費するといふ事である。實に現在の生産組織の下に於て、生産力は斯の如き二重の制限を蒙つて居るのである。(Conquest of Bread, pp. 17-21 参照) 然るに他方に於て、彼は例へば農業の可能性を論じ「若し我々が一切の事を考察に入れ、最近園藝耕作に於て爲されたる進歩と、其方法が廣く一般的に普及せんとする傾向とを感得し、今日行はれつゝある所の耕作上の試験——今日試験なるも明日實在となる所の——を注視し、且つ科學に依つて貯藏せらるゝ資源を考慮するならば次の如く言ひ得る。即ち一定の土地から彼等の生活資料を獲得する事の出来る人類の最大數の限界を、現在に於て豫想する事は全く不可能であり、又各地方に於て人類が如何に種々の生産物を有利に栽培し得るか、の限界に就いても豫想

する事が不可能である。日々に以前の限界は廣められ、新しく廣汎なる水平線が開展される。」と言ひ、又「既に知られ、而も未だ大規模に試験せられざる所の、より遙かに完全なる方法の下に於て如何なる進歩が達成せらるゝかは寧ろ豫想せざるを可とする。實に近世集約的耕作の發達は無限である。」(Fields, Factories and Work Shops, pp. 135-136) と言ふが如く、現在の組織の下に既に、將來に於ける著るしき生産力發展の具はりつゝあるを看取し、之を指摘して居る。故に若しも前述せる所の生産上の制限と之等の制限を支持する所の社會的害惡を根絶し得んか生活資料の豊富は、誠に期して待つ可きである。況んや斯の如き障礙の徹廢は生産力の異常なる發達を促進す可きの理明白なるに於て然るのである。故に曰く「我々の富の眞の増加及其の可能性を考慮し、且又、現在の經濟組織に於て不

可避なる所の生産上の直接的制限及間接的制限の兩者をも合せ考ふるならば、生活資料に對する人口の壓迫を想像するが如きは一の謬想である事を認めなければならぬ。故に現在社會の病根は他に之を求めざるを得ないのである。」(Anarchist Communism, p. 14)

八

次に労働の奴隸的繫縛よりの解放——分業の廢棄及精神労働と肉體労働との對抗の拒否は Kropotkin の學說の一大項目である。凡そ彼に遵へば、眞の經濟學は、人類の欲望の研究及人間の精力の最少可能量の浪費に依つて其の欲望を充足せしむる手段の研究である。(Conquest of Bread, p. 238) 其は個人の欲望より出發し、全人の欲望を満足せしむる手段を探究する。而して思へらく「若しも個人の欲望が經濟學の出發點として考へらるゝならば、我々は共產主義

に到達するを誤らないのである。其れは最も徹底的な最も經濟的な方法で總ての欲望を充足せしめ得る組織だからである。然るに、我々の生産が欲望の満足に適應するや否やを探ねる事なくして、現在の生産方法から出發し、利得と餘剩價値を目的とするならば我々の必然的に到達する所は資本主義若しくは高々集産主義 (Collectivism) である。——兩者は現在の賃銀制度の二つの異なる形式である。」(Ibid. p. 245)

さて全人の欲望を充足せしめ、而して此の目的に備ふる爲めに産業を如何に組織し經營すべき乎を知る所の社會は、従つて又、生産に關する幾多の偏見を一掃するであらう。斯の如き見地より Kropotkin は社會主義者すら、分業を以つて經濟上の一原則なりと信するの蒙を極力誹謗する。「彼等(社會主義者)と將來の労働組織に就いて語ると、分業は支持せられねばならないと

答へる。若しも諸君が以前留針の尖端を磨いて居たのなら、今後も引續いて留針の尖端を磨かねばならないと。諸君が一日五時間以上働かなくても宜いといふ事は眞實だ。併し全生涯留針の尖端を磨かねばならぬだらう。然るに、他の者は諸君が一生涯に幾百萬といふ留針を磨く事を可能ならしむる様な機械を設計するだらう。又或者は文學、科學、技術等の高尚な部門の専門家である。諸君が留針を磨く爲めに生れたのなら Pasteur は癩の種痘を發明する爲めに生れたのだ。革命は此の兩者を各々の仕事に其儘残すだらうと。實に此の原則こそ社會に有害であり、個人に残忍なる、且つ總ての害惡の源泉たる恐る可き原則である。」更に續けて曰く、「分業の結果は明白である。人々は二つの階級に分裂する。一は生産者階級である。彼等は消費に關して著るしく制限せられる。而して

肉體労働のみに追はれて全く思索する閑暇なく頭腦明敏を缺くが故に労働の十全は期し得られないのである。他は消費者階級である。彼等は全然又は殆ど何物も生産しない。而して他の者の爲めに考慮するといふ特權を持つて居るけれども、自ら勞苦する人々の全社會に無知なるが故に、其の考慮する所も亦十全を期し難いのである。」(Ibid. p. 246) 斯くて分業の弊害を指摘し、それは労働に對する愛著を失はしめ、發明の能力を枯死せしむるものであると觀する。

「分業とは人々の生涯を唯一つの仕事に繫縛する事である。——或者は工場で綱を組み繼ぐ爲めに、或者は一事業の工長なるが爲めに、又或者は鑛山の一定の場所に大きな石炭籠を押し下ゆく爲めに。然るに彼等の何人も、機械全般に就いて、其の事業に就いて、或は其の鑛山に就いて、何等の觀念も有しないのである。此の

事に依つて彼等は勞働に對する愛著と發明の能力——之れこそ、近世産業の初めに、今日我々の誇りとする機械を創造したものである——を破壊する。」(ibid. p. 250)

Kropotkin に依れば斯の如き分業を廢棄せんとするの主張は當然分業の結果なる經濟上の二階級即ち生産者階級と消費者階級の對立の消滅を豫期し、又必然的に精神勞働と肉體勞働の調和に關する論考を伴ふものである。此の調和の缺如は、人類生活に本然的なる筋肉勞働をして苦痛ならしめ、人をして之を忌避せんとするの舉に出でしむるのである。又此の缺如に依つて、人が獨立的地位に居るといふ事が他人の勞働に依頼して生活する事と同意義になるのである。其處には勞働の單調、生産力の浪費、勞働者の知的教養よりの除外、而して不健全にして無味乾燥なる人間生活のみが存在する。然るに今

や二つの勞働の調和は總ゆる之等の陰鬱なる印象を一掃するだらう。「其時勞働は最早や運命の呪詛とは思はれないだらう。其は正に然かある可きものとなるだらう。即ち人間の總ゆる能力の自由なる行使となるだらう。」勞働は最早や生活の一手段ではなくて其れ自ら第一の生活欲望となるのである。勞働は苦痛ではなくて愉樂である。其れは萬人相互の協力に依つて營業る、勞働の饗宴 (Festival of Labour) である。(ibid. p. 194 以下參照) 而して Kropotkin が此の調和の爲めの勞働教育に關し或は又斯の如き勞働組織の實際的計畫に關し甚だ興味多き卓見を披瀝するの一事は、彼の著書に親しき者の等しく看過し能はざる所であらう。

九

最後に賃銀制度に對する Kropotkin の批評は Marx の所謂「狹隘なるブルジョアの權利思想」

に對する駁撃に他ならない。彼は集産主義者が其の給付されたる勞働に對する報償の様式として勞働券 (labour-cheques) 使用を推擧するの矛盾を難じ、勞働券も亦私有財産制度支持の目的に合する賃銀制度の新しき形式に他ならずとして之を排斥する。(ibid. pp. 215-216) 集産主義は一方に於て生産手段の共有を主張し、他方に於て其の給付したる勞働量に應じてなす所の分配方法を認容する。「此の事は革命の原則を宣言し乍ら、此の原則が必然的に齎す所の結果を無視するといふ事である。」(p. 220) 併し乍ら「一社會は、二箇の絶對に相拮抗する原則、即ち相互が絶えず撞着する所の二箇の原則を其の基礎となし能はざるは明かである。故に斯の如き組織を保有する國民若くは團體は、再び生産手段の私有に歸るか、又は共產社會へ變革するか、其の何れかでなければならぬ。」(p. 221)

凡そ如何なる標準に依るを問はず、勞働を分類して其の間に輕重を置き、而して之等の分類に従ひ其の給付されたる勞働時間に準じて報償すると言ふが如き一切の觀念は始めから共產主義的思想に背反するものである。「社會に寄與せられたる給付は、それが工場に於けると農園に於けると將又精神勞働たるを問はず、貨幣で評價する事は出来ない。價值(所謂交換價值)の正確なる尺度とか又は使用價值の正確なる尺度なるものはあり得ない。若しも二人が各々彼等にとつては同様に快適な二箇の違つた仕事を、年中一日に五時間宛社會の爲めに働くならば、概して彼等の勞働が殆ど同量であると言ひ得よう。併し彼等の勞働を分割して一人の勞働の或特定の日、時間、又は分秒の結果が他の者の一日、一時間、又は一分秒の結果と同價値であると云ふ事は出来ない。……又我々は彼が二

時間に成し遂げたものを取つて、彼の二時間労働の收穫が、一時間だけ働いた他の者の收穫の二倍の價值ありと言ひ、此の割合で兩者に報償する事は出来ない。此の事は工業上の、農業上の、否現在の全社會生活上の一切の複合的作用を看過する事である。それは總ゆる個別的労働が如何に廣汎に過去及現在の全社會的労働の結果であるかを無視する事である。(pp. 228-229)

又曰く「我々が文明國民の富と呼ぶ所の巨大なる總量の最小部分すらも、實に此の總量の一部分である事に依つて價值を有するのである。……家屋も、街路も、運河も、鐵道も、機械も、又藝術の製作も、總て之等の物は過去及現在總ゆる時代の、又其の國及數千里を隔つる所に生活する人々の結合的努力に依つて創設せられたのである。」(Anarchist Communism, p. 16) 故に各々の部門に働く所の各人の労働の間に劃線を

全人の共同的努力に依つて作り出されたる、生産用具及社會の總ての欲望を満足せしむる所の手段は、全人の自由に委ねられなければならない。……全人は富の生産者及消費者として同一の地位に置かれねばならない。……其の事は常に人類の眞の目的であつた所の平等と自由に向つて、より大なる進歩を保障する唯一の途である。」(Anarchist Communism, p. 16) 更に曰く「生産のための必要品を共有するといふ事は共同生産の結實を共同に享樂する事を含んで居る。總ゆる賃銀制度が廢止せられたる時、そして各人が共同の幸福のために全能力を以て寄與し、社會の共同財産から欲望の最大可能量を享受する時、其時にのみ公正なる社會組織が成立し得ると我々は考へるのである。」と。(ibid. pp. 20-21)

+

洵に終局の目的に關して純正マルクシズムは

第十八卷 (八四五) 雜 錄 共產主義の經濟的基礎に就て

第六號 八一

引くといふ事は全然不可能である。従つて労働を其の結果で評量する事は不合理である。労働の總計を分割し其の部分々々を労働に費された時間數で評量する事も亦當然不合理である。(Conquest of Bread p. 231) 不正不合理なると共に其は又不平等を意味する。「各個人の必要(necessaries)は決して常に彼の仕事(work)に適應しない」からである。(p. 233)

之を要するに、生産用具の共有を實現する社會に於ては其れと共に必然的に一切の賃銀制度を廢棄するだらうと言ふのが Kropotkin の本旨である。そして其時分配は給付されざる労働量に應じてではなく、各人の欲望に應じて行はるゝと言ふのである。「我々の問題とする所は單にパンの問題だけではない。其れは人類活動の全體を包含する。併し其の基礎となつて居るのは社會經濟の問題である。而して我々は結論する、

國家を否認する無政府主義と毫も異なる所なしとは Lenin の明に斷言する所である。唯過渡期の問題に關して兩者は全く乖離する。無政府主義にとりて、或は無産者の獨裁と言ひ或は共產主義の第一階梯と云ふが如き過渡期的形態を認容するは其の事自ら共產主義の原則の否定であるに反し、マルクシストは斯の如き社會進化の階梯を必然的のものと認めて之を立證する事は即ち彼等が科學的社會主義者にしてユートピア信者に非ざる所以を明示するものであると主張する。

Marx は嘗て無政府主義の本質を説明して、「總ての社會主義者は Anarchie の下に次の事を理解する。一度びプロレタリア運動の目的即ち階級の廢止が達成せらるゝと、其の時極少數者が大多數の生産者を束縛するに役立つ所の國家の權力が消滅する。そして政府の職分

は簡單な管理の職分に變化する。」と。最後の目的に於て一致する所の一の世界は、其の手段に關して二つの傾向に分れる。一は此の状態を事物の自然からして遠き將來の中に實體化せしむるのである。他は此の状態を一撃の下に招致せんとするものである。(Mautner: Bolschewisismus, S. 211) 故に Lenin も亦「排デュロング論中「國家消滅」の有名なる説明は國家の廢止を主張する所の無政府主義者を非難して居るのではない。唯、國家の廢棄が二十四時間以内に可能であると言ふ理論の宣傳に對して彼等を非難して居るのである。」(Lenin: Staat und Revolution S. 53) 更に再び「Marx は彼の無政府主義者に對する論争の眞意が曲解さるゝ事を恐れて進んで次の事を力説して居るのである」として所謂 Marx の眞意を次の如く述べて居る。「國家の革命的過渡的形態は無産者階級

い。何となれば共產主義は社會の總ゆる力を集中して國家に依つて之を吸収せしめ、又それは必然的に國家の手に財産を集中せしむる事を以て終るからである。然るに私の欲する所は國家の廢止である。云々。」(Piechanoff: Anarchism and Socialism. Kerr edition. pp. 80-81 引用する所)の如きは、洵に一見、的を逸したる批評である。而かも此の兩者の關係の機微を洞察する者は、甚だ簡明なる右の一句に於てすら、猶且つ、社會主義と無政府主義との間に介在する深淵の如何に踰越し難きかを感知しないであらう乎。

遮莫、此等一切の關係に於ける根本問題は唯物史觀を基調する Marx の進化學説を以て、而して其の經濟的説明を以て、共產主義の叙上の發達の推移を立證し得て遺憾なきや否や、果して其間何等の矛盾をも包藏せざるや否やと言ふ

のために必要である。併し無産者階級が國家を必要とするのは唯一時的である。窮極目的としての國家廢止の問題に就いて我々は無政府主義者と全く一致して居る。我々の確信する所は此の目的を達成する爲めに武器、手段、方法の一時利用即ち搾取者に對する國家權力の一時利用が必要であるといふ事、又同様に總ゆる階級の廢止の爲めに被壓制階級の過渡的獨裁が必要であるといふ事である。」(Ibenda. S. 53-54)

Marx の共產主義の眞相を果して以上述べ來りし如く解釋す可きものとせば既往に遡りて Bakunin 等が Marx の共產主義に對する非難攻撃、就中 Bakunin が一八六九年 Pette の平和自由聯盟の大會に於ける演説の一節「私は共產主義を嫌忌する。其れは自由の否定なるが故である。私は自由なくして如何なる人間的のものも想像する事は出來ない。私は共產主義者ではな

事である。深く此等の諸點を究明する事なくして徒らに未來社會を描出するが如きは假令如何に強辯すと雖も畢竟空想主義たるの譏を免れざる可き事夙に Marx 自身の教ふる所である。

英國穀物市場の史的考察(四、完)

高 木 壽 一

七

近世英國を以て大體、チャードル王朝の時代を以て始まるものとすれば、近世初期即ち第十六、七世紀を通ずる英國穀物市場の一大特徴はロンドンの如き大都市を中心とする市場——metropolitan market——の發達である。此 metropolitan market とは多額の取引が集中せらるる所の中心的大都市を有する一大地域を云ふ。遠